

But=Except, Apart From について

鏑 木 光 朗

We could not do anything but crawl along, keeping close to the cars in front.

(New Tsuda Readers III. P.58)…… (A)

上文の but の用法に就て疑問を生じたので以下少しく調べて見たいと思う。上文全体の意味より考えると、but=except, apart from と考えられる。即ち上文は書き直すと次の如くなる。今下線の部分だけを問題にする。

(A) =We could do nothing but crawl along. (not anything=nothing)

=We could only crawl along. (nothing but=only)

以上の如くなり、意味の上からは問題ないのであるが、この but の品詞は一体何であり、又その用法は如何かと言う点になると少しく調べて見る必要がある。さて but の項を辞書で調べて見ると、(Webster : New collegiate Dictionary に依る)

but. Prep. A.S. butan without, on the outside, except, besides.

2 Except : Specif :

a) with the exception of : as, all escaped the fire but me.

b) Other or otherwise than : as, he cannot but hear.

Conj. 2 Introducing a subordinate clause.

c) Except that : when not : as, it never rains but it pours.

となり、大体以上で (A) の場合の but は Prep. (Preposition の略) 2 の a) か、Conj. (Conjunction の略) 2 の c) の何れかに相当するものと思われる。即ち (A) の but は Prep とも又、Conj とも考えられる。果して何れであろうか。更に精しく知るために N.E.D. を見ることにしよう。N.E.D. に依れば、but は O.E. (Old English) 及び M.E. (Middle English) に於ては、各々 Prep 及び Adverb としての用法しかなかったが、P. E. (Present English) になるに至って次第に Conj としての用法を持つに至ったと言うのである。そして、その理由としては、名詞及び代名詞の語尾変化が消失して来たためであり、O.E. 及び M.E. に於ては、明かに but の後には目的格を伴ったのが、P.E. に於ては、主格をも伴うに至ったと言うのである。その例として次の例を挙げている。

即ち、Nobody else went but me (or I) =Nobody else went except me or=Nobody else went except that I went. となり、me の代りに I が用いられ、その結果として Conj としての but の用法が生ずるに至ったと言うのである。以上に依り、except の意味の but には、P.E. に於ては、Prep 及び Conj の二通りの用法があることを知るのである。but の後に名詞及び代名詞が来た場合は問題ないが、(A) の場合のように bare-infinitive が来た場合は、but の品詞は如何であろうか。一見しただけでは分らないが、今 (A) の文をもう一度書き直して見よう。

即ち、(A) =We could not do anything but(that we)crawl(ed) along. …… (B) となるのである。

即ち (A) の文は (B) の文の省略と考えるのである。

かように考えて来ると、(B)の文では、but that で Conj としての用法をなしていると考えられるのである。換言すれば、(A)の文の but は後に that-clause なる subordinate-clause を伴う Conj であることを知るのである。

N.E.D.but の Conj の項に、Conj (II) In a complex sentence ; introducing the subordinate clause, with general sense 'except that' : the full expression being but that, often reduced to but として次の例が挙げられている。

8 But that=Except (that), b) with omission of that, ex Nothing would serve him but he must imitate Alexander.

以上に依っても but that は Conj であることを知るのである。又、E.Kruisinga はその著 "A Handbook of Present-Day English Part II" の Conj 'But' の項に於て、But は Simple Sentence 中にては、Co-ordinate Conj としても、又 Subordinate-Conj としても用いられるとして、更に Simple-Sentence 中にては、Conj の but は Adverb としての but とは容易に区別出来ないとして次の例を挙げている。

即ち、① 'only' as in She is but a child. ② 'except', as in They are all wrong but he. ③ 比較級及び同様な語句の後では 'than' として、as in There remains no more but to thank you for your courteous attention It is nothing else but laziness.

更に、Subordinate-Conj としての but は that を加えることにより強調されるとして、次の例を挙げている。

即ち、① In the sense of except that : ex. Each would have done the same by the other but that they lacked the courage. ② In a sense very similar to that : ex He is not such a fool but that he can see that.

②によっても分る如く、but that=that の場合もあることに注意すべきである。この場合には、but の意味は全然無くなっている。然し、問題の(A)の文の but that は勿論 except that の意味であることは言うまでもない。さて以上のことより、E.Kruisinga は次の如く結論している。

即ち、but は Conj としての意味は種々あり、各々連関性が無く、孤立している。その結果、P.E.に於ては、but は強力な要素ではなく、but の幾つかの用法は literary English に限られて用いられる。即ち、but は結局は消失して行く運命にあると言い、その例として、前述の Adverb 及び 'than' として用いられた ①、③の例を指摘しているのである。彼は以上の如く言っているが、except that としての but that は subordinate-Conj. として考えているのである。更に林語堂はその著開明英文文法に於て次の如く述べている。

即ち、「But, Than—立派な作家達でも、次のように but と than を目的格代名詞を伴う前置詞として用いることがある」として次の例を挙げている。即ち、

ex All but me had fled. /No one wishes it more than us. 更に「しかし、but も than もどちらも接続詞に用いることができるから、but 1/than we と言っても差支えないのである。原則として but と than は主格の代名詞を伴う接続詞として用いることのできる場合に目的格の代名詞を従えた形で使うことは避けねばならない」と述べて、but に前置詞、接続詞両用法があることを述べ、but を前置詞として用いる場合はその後目的格を用い、接続詞として用いる場合にはその後主格を用いることを強調し、形の上からの明らかな区別をしていることを知るのである。

然しこれは代名詞の場合は出来るとしても、名詞の場合は如何であろうか。少しく疑問となるのではなからうか。更に彼は別な処で次の如く述べている。即ち

“15.44除外と包含 (Exclusion and Inclusion) ——

Except, excepting, but は、接続詞としても前置詞としても同じ意味に用いられる。Except = 除非 (～でなければ) —— But for は句の形をとることが多く、except for = 如非 (～がなければ) の意味である。そして次の例を挙げている。即ち

ex Excepting for a little over-use of red and green, the Painting is perfect.

But for your help, I might have died.

“I can resist everything except temptation,” says Oscar Wild,

When we arrived, we saw nothing except three persons sitting in the front row.
又更に but that の項を見ると、次の如く言う。 “7.42 what → But what は主に国語に用い、文章用にはたいてい but that が用いられる” そして次の例を挙げている。即ち

- ① Who knows but that (what) he may have purposely told you a lie ?
- ② Who can tell but that (what) he may be the most important man in the country three months hence ?

この最後の例文 but that を用いた文が形の上からは (A) の文を書き直した (B) の文に相当すると考えられるが、林語堂の挙げた例文の but that は明らかに接続詞として if……not = unless の意味で用いたのであり、(A) の文を書き直した (B) の文の場合の but that は except for の意味で用いたのである。然し乍ら、現在の用法としては、but that の場合は except for の意味に用いた例がなく、何れも if……not の意味に用いられているようである。先きに N.E.D. の例を挙げたが古い文の例 (1701年) であり、E. Kruisinga の例も if……not の意味である。従って (B) の文は、「我々がそろそろ進むのでないならば、何をする事も出来なかった」となり、「我々はそろそろ進むこと以外何も出来なかった」と言う (A) の意味とは全然異なった意味となってしまうので、現代用法としては、except の意味としての but を含む。(A) の文を (B) の如く書き直すことは出来ないことを知るのである。さて次ぎに E. A. Sonneushein はその著 A New English Grammar P90.499, 500 に於て次の如く述べている。即ち

499 (3) as a Pseposition with the accusative (= ‘except’):

There was no one left but me. R.L. Stevenson No one had the least control over him but her. W. Black.

500 (4) as a subordinatiug conjunction :

(a) = ‘if not’, ‘unless’, other than’ :

Away went Gilpin, who but he ? Cowper

(‘who but he?’ = who if not he? ; who went away, if he did not go away?)

None but they have a right to rule. Dr. Arnold It never rains but it pours.
(‘but it pours’ = unless it pours ; without pouring)

The boy stood on the burning deck,

whence all but he had fled. Mrs. Hemans.

(The meaning might have been better expressed by using ‘but’ as a preposition with the accusative, and the line is sometimes quoted with ‘but him’. This, however, is not what Mrs. Hemans wrote.)

It is anything but right, (‘but right’ = ather than right)

I cannot but think so (= I cannot do any thing other than think so)

Sonneushein は以上の如く述べているが、but の前置詞としての用法は、前述の林語堂と同じである。又従位接続詞としての用法は 'if not', 'unless' 'other than' の意味であるとして、以上の如く数例を挙げているが、最後の例文である。I cannot but think so. の文が問題としている (A) の文に類似した文ではないかと思われる。彼は I cannot think so=I cannot do anything other than think so と考えて、but が 'other than' の意味を持った従位接続詞として考えているので、同類と考えられる (A) の文にても、but は従位接続詞と考えて良いのではなからうか。

この事はもう少し後に更にくわしく考えて見ようと思う。さて前に、(A) の文を (B) の文に書き直すと全然意味が異なるので、(A) の文は (B) に書き直すことは出来ないと思へたが、次に問題の (A) の文を次の如く書き直したならば如何になるであろうか。即ち (A) =We could not do anything but (to) crawl along…… (C)

この場合は but の後に bare-inf. (bare-infinitive の略) の crawl along が置かれたと考えるのである。この場合は but は如何なる品詞であり、その用法は如何であろうか。この場合、but を Prep と考え、to crawl along を but の object と考えるのが正しいと思う。何故なら but, except, about という Prep は object として to-inf を支配することがあり得るからである。その例を挙げると次の如くなる。即ち、

There was nothing to do but walk. (or to walk)

He will do anything except resign' (or except to resign)

We are about to object.

The train is about to start.

従って、問題の (A) の文を (C) の文に書き直した場合の but は to-inf を object とする Prep. と解して良いと思う。と言うことは問題 (A) の文の but も bare-inf である crawl along を object とする Prep. と解して良いのではないか。Jespersen に依るとかような but につき次の如く言っている。即ち、「若しも bare-inf が but, except, save の後に屢々用いられるならば、それは此等の語 (即ち, but, except, save) が Prep. であると同様に Conj でもあるからである」と言うのである。即ち、He cannot but admire her なる文に於て、but の後に bare-inf 'admire' が置かれたのは、but が Prep でもあり、又 Cong でもあるからと言うのである。それ故、上文を He cannot (do anything) but (to) admire her の省略と考えた場合は but を Prep と考えているものと解して良いのではないかと思う。Jespersen の考えは、but に Prep 及び Conj の二つの用法があるために、He cannot but admire her. なる形が生じたとするのであり、この点 N.D.E. に於て屈折語尾の消失により、but に Prep. 及び Conj. の二つの用法が生じたとする、H. Murray の説とは相反するように考えられるが、何れの説を正しいとする根拠も無い。然し、何れにせよ、(A) の文を (C) の文に書き直した場合の but を Prep と考え、to-inf を object と考えて良いと思う。即ち (A) の文の but も Prep. と考え、bare-inf. である crawl along を object と考えて良いと思うのである。前述した如く (A) の文は現代英語に於ては (C) の文にしか書き直せないとするならば、(A) の文の but は Prep であって Conj ではないと言えるであろう。but には確かに Prep, Conj. の両用法があり、その区別に迷うのであるが、以上考えて来たことにより、問題とする (A) の文の but は Prep と考え、bare-inf である crawl along をその object と考えるのである。問題はこれで一応解決したと思うが、先きに問題 (A) の文は、Jespersen もその例文で挙げているように、(即ち He cannot but admire her) 次の文と比較して考えると如何であろうか。即ち

We could not but crawl along…… (d)

この文は現代英語に於ては cannot but+bare-inf の形即ち～せざるを得ぬとして考えられて居るが、かかる意味は何故生じるのであろうか。これは次の如く考えられるであろう。即ち、(d)の文を次の如く書き直して見よう。

We could not (do anything) but (to) crawl along…… (e)

(d)の文を省略を補って(e)の文に直した場合に～せざるを得ないと言う意味が生ずることが自ら分るのであろう。ただ現代英語に於ては、(d)の文を見た場合、(e)の文の省略と考えずに直ちに cannot but+bare-inf の形から～せざるを得ないと言う意味を知るのである。ところが、この(e)の文を前述の問題としている(A)の文と比較すると如何であらうか。全く同じ文であることが分るのである。(A)の文と(e)の文が全く同じであると言うことは、(A)の文と(e)の文の省略した文と考える(d)の文とが全く同じであると言うことである。そして(d)の文に於ては前述した如く現代英語の用法では cannot but の後の crawl along は bare-inf と考えているのであるから、当然(A)の文に於ても、crawl along は bare-inf と考えて良いと思う。従って、(A)の文に於ては but は Prep であって bare-inf である crawl along を目的語としていると言うことが出来ると思うのである。以上 Jespersen, Sonnenschein 等の考えからしても(A)の文の but は Prep であって bare-inf を目的語とすると言えないのではないかと考えられる。

さて更に研究社発行の英文法シリーズ 'But' の項を見ると、次の如く述べている。即ち、but が接続詞、前置詞の何れとも見られるのは次の如き場合である。

(1) Except (を除いて)の意味で否定、不定代名詞、疑問詞、最上級等に続く場合である。

She was brought nothing but misery.— (Hornby)

What is he but a student ?

I know all the brothers but one

He was the greatest man but the King.

(1) 'but+ (To-) infinitive' : but の次の不定詞には to が附くこともあり、附かぬこともあるが、次の如き場合には附かないのが普通である。即ち

She does nothing but laugh.

I cannot but admire his courage.

以上の如く述べて、問題の(A)の如き but+bare-inf の場合の but は前置詞、接続詞何れとも見られるとしている。が更に同シリーズに於て、「上例は何れも文中に do や can を含む場合である。

この時の but について、G.O.Curm は例えば最初の例は She does nothing but (that she does) laugh. の省略であり、第2の例は、I cannot (do anything) but admire her his courage の省略であって、I would rather die than (that I would) yield. などの than と同じく接続詞としている。文に対して、Jespersen は I cannot but admire his courage の admire が can に支配されているという感じは、殆んど I can but (=only) admire という場合の関係と同様であり、She does nothing but laugh. の laugh も同様に does に支配されているという感じであることは認めているが、Curm の論に対しては、不自然な省略の根拠の無い仮定ばかりであるとして排し、こういう場合の but, except, save は Hewas about to say などの about と同様、英語の不定詞の前に前置詞の来る稀な例の一つとしている」と述べている。以上の如く述べているが、Curm の考え方より Jespersen の考えの方を取って、I cannot but admire her なる文の but は前置詞であって、後に

admire なる bare-inf. を支配していると考えたい。さて最後に結論的に述べるならば、but は元来前置詞及び副詞であったが、後に接続詞として用いられるようになった。現在に於ては英語の名詞の語尾変化が消失したために、前置詞、接続詞の区別がつかなくなった。ただ代名詞にのみ格変化があり区別がつくと思われるが、それも国語に於ては、me, us が主格 I, we の代りに用いられるので不明瞭である。即ち、一例を挙げると、Nobody else went but me (or I) の場合の but は、Nobody else went except that I (went) のような接続詞と解することも出来て、but me としても又 but I としても意味は全然同じであって、何れの言い方も文法的に正しいと考えられるのである。以上から現代英語に於ては but = except, apart from の場合の but が前置詞であるが、又は接続詞であるかは判別に苦しむのであるが、之ははっきりと区別するよりも、but には前置詞、接続詞両用法があると考えて良いと思うのである。然し何度も述べた如く、問題 (A) の文の場合の如く but の後に bare-inf を伴う場合の but は前置詞であって、but の後の bare-inf は but の目的語と考えて良いと思うのである。以上 but の用法につき疑問の点を感じたので、若干調べその結果を述べた次第である。なお、不備な点も多々あることと思うので後日暇あれば更に調べて見度く思うのである。

